

感覚過敏に困り感を持つ発達障害児・者への支援の現状と課題

修士課程 1年 信 吉 真璃奈
 博士課程 2年 高 岡 佑 壮
 修士課程 1年 矢 野 玲 奈
 教授 下 山 晴 彦

はじめに

近年、発達障害児・者の身体的な問題が注目されている。身体的な問題は、DSM-5などの国際的な診断基準において自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder; 以下、ASD) や学習障害などの本質的な特徴としては記述されていない。しかし、多くの発達障害児・者が感覚や運動能力の特異さによる困り感を持つことが様々な文献で示されている。そのため支援に際しては、診断基準である発達障害特性に加え、身体的な問題も考慮することが重要と考えられる。

感覚や運動能力といった発達障害児・者の身体的特徴の特異さに関しては、様々な知見が蓄積されている。

Ayres (1979) が提唱した感覚統合理論によると、感覚刺激を組織化する脳内処理過程、つまり感覚統合の問題は、学習障害児や ASD 児などの環境への不適応の背景となっている。ASD 児の感覚反応異常は複数の種類に分類されており、身体的問題には様々なバリエーションが存在することも見出されてきた (Dunn, 1997)。

さらに近年、当事者の体験談が多数出版され、感覚や運動能力が引き起こす困り感に関する知見が充実し始めた。例えば、綾屋・熊谷 (2008) において、ASD 当事者の綾屋が、空腹時に複数の身体感覚や感情が生じるため空腹感を捉えることが困難であると語っており、発達障害児・者の持つ身体的な問題の詳細が広く知られつつある。

しかし、このように知見の蓄積が進む中でも、現状では体系的な支援方法が確立しておらず、研究も発展途上であると考えられる。特に本邦においては、感覚や運動の問題に関するアセスメントツールが海外と比較して充実していないという問題もある。例えば、発達性強調運動障害を評価する M-ABC (Henderson & Sugden, 1992) は海外でよく用いられるが (Venetsanou et al.,

2011)、本邦では標準化されていない。また、感覚の問題を評価する感覚プロフィール (Brown & Dunn, 2002; Dunn, 2002; Dunn, 2006) の日本語版が、2011 年になるまで作成されず (萩原・岩永, 2011)、その青年版の妥当性も 2014 年によく検討されている (平島ら, 2014)。このことから、妥当性・信頼性の高いアセスメントツールを用いた支援も未だ確立していないことが窺える。

以上より、身体的な問題への支援の充実は、発達障害臨床における急務であると考えられる。中でも、特に様々な困り感に繋がる感覚過敏を持つ発達障害児・者は多く、具体的な対処が求められていると考えられる。

例えば、川崎・三島・田村・酒井・猪野・村上・横田・水野・丹波 (2003) によると、発達障害児・者の 95% は、知的能力に関わらず聴覚過敏、触覚過敏、偏食のいずれかを持つ。Bromley et al. (2004) も、調査対象である ASD 児の 71% に聴覚過敏、52% に触覚過敏、41% に嗅覚過敏があると報告している。また、調査対象である精神発達遅滞者の 62% に触覚過敏が認められるとの報告もあり (McCracken, 1975)、太田・土田 (2001) はこのような感覚情報処理の問題が発達障害全般に存在する可能性を指摘している。この問題に基づく困り感の報告も多く、例えば浅井・杉山 (2007) は、聴覚過敏によりざわめきに耐えられず教室にいられない ASD 児の例を挙げている。

加えてこれらの困り感には、周囲の理解を得られにくいという特徴もある。高橋・増淵 (2008) は、当事者が自分の身体感覚を「普通」であると考えてるために、感覚の特異さによる問題が明らかにされづらく、諸々の困難を「わがまま」「自分勝手」と誤解されやすいと指摘している。つまり当事者は、感覚過敏のない状態を実感することが困難であるため、自身の感覚の特異性に気づきにくく、その特異さが周囲にも伝わりにくいと考えられる。

以上のことから、感覚過敏には、「様々な困難の要因と

なる一方で、その特徴が周囲に理解されづらい」という側面が強いと考えられる。このため、感覚過敏による発達障害児・者の困り感や、その困り感への有効な支援を、支援者が具体的に把握することが重要と考えられる。さらに、前述のように「有効な支援方法自体が充分確立されていない」という側面もあるため、現在の支援の限界点の検討も、支援の改善のために重要と考えられる。

よって本論考においては、発達障害児・者の感覚過敏に関する文献をレビューし、当事者の困り感と有効な支援方法を整理しつつ、本邦の支援の現状と今後の課題を明らかにする。

感覚過敏のアセスメント

本邦における感覚過敏のアセスメント法を概観し、支援への寄与を整理する。

前述の通り、本邦では海外と比較してアセスメントツールの導入や開発が遅れが見られるが、臨床現場で活用可能なツールは少数ながら存在する。例えば、前述の感覚プロフィールの日本語版 (SP-J) には、乳幼児版 (Dunn, 2002)、子ども版 (Dunn, 2002, 2006)、青年・成人期版 (Brown & Dunn, 2002) があり、対象の年齢に応じたアセスメントが可能である。SP-J においては「音を避けるために両手で耳を覆う」などの項目に対し、保護者が5段階で評価を行う。また、本ツールは感覚処理の特異さの程度の算出に加え、Dunn (2011) のモデルに基づき「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」のスコアも算出される。さらに、乳幼児版と3～10歳版に関しては、感覚系ごとにスコアが算出可能であるため、対象児の個性が見出しやすいという利点も持つ。

他にも、太田ら (2002) が開発した日本感覚インベントリー改訂版 (JSI-R) は、日本感覚統合学会のサイトから入手可能であり、臨床現場での使用頻度が高い (松島・加藤, 2014)。JSI-R は、前庭感覚、触覚、筋肉・関節の感覚、聴覚、視覚、嗅覚、味覚の特異さの程度に関して保護者が5段階評価を行うことで、各々の感覚機能の発達状態を調査する。ただし、感覚の鋭さを調べる項目 (「突然、大きな音がすると怖がる」など) と、鈍さを調べる項目 (「音が聞こえる方向がわからない」など) が混在し、結果から感覚過敏と鈍麻が判別できないという限界がある。

上記のようなツールを用いたアセスメントの意義は、信頼性の高いデータの収集と、臨床・教育現場での指導や家族指導に役立つ情報の提供にあると考えられる (平島ら, 2014)。加えて、当事者が自分の感覚特性を理解し、

感覚調整のインプットを自己調整できることが安定した自立生活に繋がるため (萩原, 2009)、支援者がアセスメントツールを用いて感覚特性を分かりやすく伝えること自体が、自己調整の促しという支援になり得る。

ただし、上記のような質問紙法によるアセスメントには、記入者が主観的に判断するという限界がある (松島・加藤, 2014)。また、「～が我慢できない」などの項目に関して、チェックすべき我慢できなさの程度が判断しづらいという当事者の声が寄せられた調査もある (高橋・増淵, 2008)。このため、感覚過敏のアセスメントに際して、上記のようなツールは大まかに特徴を把握するものに過ぎず、具体的な支援においては細部への観察が不可欠であると考えられる。例えば萩原 (2009) は、特に対象が思春期以降である場合の情報収集における、直接観察や保護者・教師へのインタビューの重要性を指摘している。

以上より、有効な支援を行うためには、大まかなアセスメント法に限らず、細部に注目することで見出される様々な苦しさや困り感についても把握しておく必要があると考えられる。そのため続いては、各々の感覚別に生じる困り感と支援方法について、より詳しく整理する。

感覚過敏の困り感とその支援

前述のように、発達障害において感覚過敏は頻繁に生じるが、その種類は当事者によって千差万別である。そのため、本章では様々な感覚過敏の種類、各々の感覚別に生じる困り感、感覚過敏に対する支援について述べる。

様々な感覚の過敏と困り感

聴覚過敏 発達障害児・者は、環境音や人の声などの聴覚刺激を不快に感じることが多い。高橋・田部・石川 (2012) によると、「クラスメイトが急に大きな声を出したり、先生が突然怒鳴ったりするなどの突然の大きな音は、非常にストレスを感じる」という項目は、発達障害者の46.8%が該当した。また、「赤ちゃんの泣き声がとても苦手」という項目は、定型発達者の中に該当者がおらず、発達障害に特有の聴覚過敏とされている。

発達障害児は聴覚刺激に対して独特な感性を持ち、人の泣き声にパニックを起こすのに、近くで突然楽器が大きな音で鳴っても全く驚かないというように、過敏性と鈍麻性を同時に持つことも多い (萩原, 2009)。

触覚過敏 発達障害児・者は、定型発達者にとって平気な触覚刺激を「痛い」「不快」と捉える。例えば、服や下

着、雨や風、人に触られたり抱かれたりすることが「痛い」と捉えられたり、砂や泥の感覚が「不快」と感じられたりする(生島, 2009)。また、帽子やジーンズ、ブラジャーなどのしめつけ感を苦手とするなど衣服に悩む場合も多い(高橋ら, 2012)。

加えて、シャワーや洗髪、歯磨きを嫌がるなど、衛生面での問題に繋がる場合もある(萩原, 2009)。

嗅覚過敏 高橋ら(2012)によると、発達障害者の約15%が「化粧品のおいがとても苦手」、「焦げ臭いにおいにとっても敏感」という項目に該当した。特定のおいの物を嫌う嗅覚過敏は、特に幼児によく見られ、苦手なおいには、体育館や体育用具室、接着剤や絵の具などの図工用品、給食のおいなどもあり、生活の様々な場面で不具合が生じていることが窺える。

また、場面を選ばず自分が嚙んだ袖についた唾液、脇の下、陰部のおいなどを嗅ぐなど、社会的に不適切な行為に繋がる場合もある(萩原, 2009)。

視覚過敏 発達障害児・者は視覚的学習が比較的得意であると言われる一方で、明るさや色に対して過敏であることが多い。例えば、蛍光灯は新品であっても瞬いて見えるため、ワット数の低い白熱灯の部屋でないとは勉強できないASD児の事例がある(萩原, 2009)。

固有感覚、前庭感覚 固有感覚や前庭感覚の異常は、運動の苦手さや方向・空間認知の苦手さ、巧緻性の低さなど身体の様々な側面に表れる。

固有感覚に関しては、感覚過敏よりも感覚情報の調整や処理の困難さが体験される。高橋ら(2012)によると、「よく他人におつかったり、つまずいたりする」、「よく物を落とす」、「自分の体の感覚がときどきわからなくなってしまう」といった障害がある。

前庭感覚過敏であると、体の動きの多い遊びやスポーツはクラクラするような感じがして上手く動けない(萩原, 2009)。競技では、サッカー・ドッジボール・バレーボール・器械運動・バスケットボールで困難を感じる割合が有意に多かった(高橋ら, 2012)。また、「左右、右回り、反対回りなどに混乱する」、「車の運転はとても危なくてできない」という事例も存在した。

関連するその他の障害

偏食 触覚や嗅覚などの感覚過敏の表れとして偏食が頻繁に認められ(川崎ら, 2003)、食べ物の食感やにおいを耐えがたく感じる。加えて、少し温かい食べ物を火傷し

そうに熱く感じるなど、口腔感覚過敏を持ち合わせている場合もある。

身体の疲れやすさ 自律神経や免疫システムの過敏性もよく見られ、特に感覚過敏を我慢した際の身体の疲労や発熱のしやすさ、アレルギーなどがよく指摘される(高橋ら, 2012)。ニキ・藤家(2004)で当事者のニキは「自閉症は身体障害である」と述べており、当事者にとっての身体的な困り感の強さが窺える。

感覚過敏に対する支援

感覚過敏への支援は、感覚統合療法に代表される作業療法と環境調整に大別される(Hazen et al., 2014)。また、海外では聴覚過敏に対する系統的脱感作による支援も報告されている(Koegel et al., 2004; Lucker et al., 2012)。

行動療法 海外では一部の聴覚過敏に対する系統的脱感作による支援の報告があり、特定の恐怖症と同様に有効との報告がある(Koegel et al., 2004)。これによると、掃除機やトイレなどの苦手な音に関して階層表を作成し、徐々に慣らすことで、聴覚刺激に対してパニックに陥らなくなったとされている。Lucker & Doman(2012)によると、聴覚過敏は知覚の過敏性というより聴覚刺激へのネガティブな感情反応であるため、脱感作は有効な支援方法となり得る。一方で、本邦においては不快な刺激に慣れる訓練は危険であるという指摘もある(岩永, 2013)。

感覚統合療法 感覚統合療法は、発達障害児の身体図式や身体イメージ、協調運動や視覚-運動機能、感覚刺激への反応の改善を目指す作業療法である。活動では、平均台・梯子・トンネルなどのサーキット課題、バランスのとれた姿勢の保持、触覚を用いたブロック探しなどを行う(岩永, 2013)。自分では把握しにくい基本感覚系(触覚、前庭感覚、固有感覚)に働きかけ、それらを視覚認知や聴覚認知に結びつけることを目的とする(世良, 2010)。

また、刺激を調整して与える方法もある。例えば触覚過敏児に対しては、嫌がらない部分から徐々に範囲を広げてマッサージをすることで、刺激の受け入れの許容力を高めていく。感覚同士の関連性から、ある感覚過敏の緩和に伴い他の感覚過敏も緩和される場合がある(岩永, 2013; 佐久間, 2013)。

このような感覚統合療法的アプローチでも改善されな

い感覚過敏に対しては、環境調整が選択される。

環境調整 環境調整に関しては、各感覚過敏に対して種々の方法が考案されている。

聴覚過敏には、耳栓、イヤーマフ、ヘッドホンなどがよく活用される（浅井・杉山, 2007; 岩永, 2013）。視覚過敏には、サングラスの使用や照明器具の工夫を行う（浅井・杉山, 2007）。

当事者自身も工夫を行っている。当事者の藤家は「メガネをかけていなければ、視界に関係ないものが入ってくるのでうまく歩けなくなる」と述べ、視覚情報の安定のためにメガネをかけている（ニキ・藤家, 2004）。生島（2010）では、音の緩和のための帽子の着用、遮断のためのウォークマンや耳栓の使用の例が挙げられている。

外的環境にも工夫が必要である。例えば、学校や職場において、音の少ない場所の設定、座席位置の変更、パーティションの使用といった工夫がある。生島（2010）では、聴覚過敏の子どもへの対応として、休み時間の喧騒を避けた短時間登校、別教室や保健室の利用を挙げている。しかし、現場の教師は集団教育を重視しており、ASD児を別教室で教えることに関して戸惑いが強い者も多い（小松・北島・竹田・今野, 2005）。生島（2009）では、教師は子どもの困った行動・世話の焼ける行動の背景にある感覚過敏を知り、教育環境の整備、学習方法の工夫、制服を強要しないといった配慮が必要であると述べている。

最後に上記以外に提唱されている支援を概観する。

佐々木（2013）は、支援における配慮として「苦手な刺激を除く」「見て確認できるようにする」「活動を段階づける」「本人の手で能動的に関わる」「落ち着ける方法を見つける」を挙げている。その際、感覚遊びや感覚入力が役立つ場合がある。例えば、いじくりおもちゃやブランコなど自分にとって快い感覚の入力を用いることで、感覚過敏による興奮やパニックを防ぎ、おさめ、気持ちを立て直すことができる（萩原, 2009）。そのため支援に際しては、感覚過敏に加え感覚欲求の有無のアセスメントも必要と考えられる（生島, 2009）。

また、感覚過敏は成長に伴い落ち着くことが多い一方で（川崎ら, 2003; 萩原, 2009）、思春期以降も継続する感覚特性もある（松島, 2013）。また、感覚刺激を回避することは年齢の影響を受けないため（松島, 2013）、苦手な感覚刺激に対する適切を促す支援も望まれるであろう。

考察

上記のように、先行研究においては感覚過敏への有効な支援方法の開発や効果検証が行われている。しかし現状の支援では、発達障害児・者が持つ生活上の困り感の払拭には至っていない。また、感覚過敏に関する研究においても課題が示唆された。以下では、支援における課題、他の発達障害特性やメンタルヘルスとの関連、研究方法における課題に関してそれぞれ論じる。

支援における課題

現行の支援方法においては、主として聴覚に対しては行動療法、触覚、前庭感覚、固有感覚に対しては感覚統合療法、改善が難しい場合やその他の感覚に対しては環境調整というように、対象となる感覚ごとに個別の対応がなされている。しかし、実際の生活場面では、必ずしも感覚過敏の対象を明確に定められるとは限らない。例えば、高橋・増淵（2008）が「その他」として扱っている体温調節の感覚のように、どの感覚に焦点をあてるべきか判断し難い感覚過敏が存在する。また、例えば偏食は、味、におい、食感を司る嗅覚、触覚、口腔感覚に焦点を当てられやすいが（萩原, 2009 など）、普段と色や形が違う食べ物を受けつけないなど視覚情報への過敏性が原因である事例も報告されており（生島, 2010）、複数の感覚過敏が組み合わさって問題に繋がる場合がある。このように、現実場面での感覚過敏による困り感は刺激と一対一対応で生じない場合も多いが、現状ではそのような現実の文脈に沿った支援はあまりなされておらず、より限定された場面での支援が中心となっている。

他の発達障害特性との関連

感覚過敏は、特定の刺激への苦手さやパニックなどが問題として取り上げられており、発達障害の他の特性と関連を考慮した支援は少ない。しかし以下で示すように、近年、感覚過敏と他の特性との関連が示唆されている。

第1に運動能力に関して論じる。運動能力は当事者にとって切実な問題である場合が多く、例えば高橋（2012）において当事者の高橋は、学童期に図画工作科での製作に非常に長い時間がかかったと語っている。一見このような運動障害は、感覚特性と無関係であるが、Millerら（2007）は「感覚ベースの運動障害」の存在を指摘しており、姿勢の崩れやすさなどを感覚処理の障害として扱っている。運動能力の問題は外界からの刺激を脳内で統合し、それに応じて身体を動かすことの困難から生じるとされるが（Ayres, 1979）、感覚過敏を含めた感覚特

性がその情報処理過程に影響を与えている可能性が考えられる。

第2に対人関係に関して論じる。現状では対人関係に関する視点を含む支援は少なく、先行研究も感覚過敏と対人関係の問題の相関を示すに留まっているが (Hilton et al., 2010; Watson et al., 2011 など)、近年、以下に述べるような関連が指摘されている。ここでは、対人回避とコミュニケーションに関して論じる。まず対人回避は、社会性スキルの未発達と解釈されやすいが、山本ら (2007) は、対人刺激は様々な嫌悪刺激となるため回避されやすいと指摘している。例えば、触覚過敏を背景となり、スキンシップや、集団遊び・スポーツを避ける場合がある (荻原, 2009)。次にコミュニケーションに関しても、両者の関連が示唆されている。例えば片山 (2014) は、当事者の立場から、コミュニケーションは視覚刺激や聴覚刺激を中心に多様な感覚刺激を同時にインプットしなければならない行為であるため、ストレスが大きいと指摘している。また、綾屋・熊谷 (2008) も当事者の視点から、感覚過敏を「身体内外からの感覚を絞り込まず、そのまま拾ってしまい、それらをパニックなどの形で表出してしまう様子」と表しており、コミュニケーションにおいては、動作、表情、視線などを発言内容と等価に感受するため、表出を意味としてまとめあげられないために相手の意図の判断ができないと論じている。

第3にパターンへの固執に関して論じる。感覚過敏とパターンへの固執との関連に関して、例えば当事者の綾屋は、身体内の感覚過敏により次の行動を決定できないため、予め行動をパターン化して対処している (綾屋・熊谷, 2008)。同様に、決まった個数しか食べないような偏食に関して、感覚過敏とパターンへの固執との関連が指摘されている (萩原, 2009)。また、新しい場所における緊張など変化への敏感さは、パターンへの固執の文脈で論じられることが多いが (Bruneau ら, 2014)、「視覚や音の反射状況の違いから精神的に落ち着かなくなる」など感覚過敏による影響が示唆されている (稲福ら, 2013)。

第4に選択的注意に関して論じる。選択的注意の問題は、発達障害者が示す注意機能の特徴のひとつである (松島, 2013)。聴覚においては、聴覚過敏の背景となり、雑多な音から選択的に拾い聞くことの困難に繋がると指摘されている (岩永, 2013)。例えば、高橋ら (2012) において発達障害者の約25%が該当した「油断するとすぐに集中力が途切れて思考が沈んでしまい、人の話はまるでBGMのように流れさってしまう」、「友だちのひそひそ声に集中してしまって授業が聞こえない」は、選択的注

意の問題と聴覚過敏を併せ持った状態であると考えられる。視覚においても、「車窓の動くものを全部目が拾うため、車に酔ってしまう」など (高橋ら, 2012)、視覚過敏との関連が報告されている。また、知人を「知らない人だと思ってしまう (東田・東田, 2005)」という相貌失認も、顔に関する些細な情報の感受という視覚過敏と選択的注意の問題の組み合わせである可能性がある。

このように、他の発達障害特性の問題として捉えられるものの中には感覚過敏と関連が示唆されるものが多数存在するため、今後は問題の要因に関する精密なアセスメントと感覚過敏を考慮した支援が求められるであろう。

メンタルヘルスとの関連

感覚過敏は、当事者のメンタルヘルスに対してネガティブな影響を及ぼし得ることも指摘されている。

まず、感覚過敏は抑うつとの相関や (Tsuji et al., 2009)、不安との相関 (福島, 2014) が指摘されている。また、教室内のざわつきに耐えられず出て行く (浅井・杉山, 2007)、制服の詰襟や非常ベルの音で不登校になるなど (浅井・杉山, 2007; 岩永, 2013)、感覚過敏が社会的不適応に繋がる事例も報告されている。発達障害児においては、以前から不安との相関が報告されてきたが (White et al., 2009; Gillot et al., 2014)、その相関に感覚過敏が影響していることが予想される。例えば、社会的な拒絶に対する敏感さは不安やバーンアウトに繋がるが (Romen & Baldwin, 2010)、前述のような対人関係における些細な情報への過剰反応が背景にある可能性がある。

また感覚過敏はASDの中核症状である反復行動との関連が指摘されている。例えば荻原 (2009) によると、触った物のおいを必ず嗅ぐなどの儀式的行為の背景に嗅覚過敏がある場合がある。近年、ASDの反復行動は、特に子どもの強迫性障害 (Obsessive Compulsive Disorder; 以下OCD) との関連で注目されている。ASDを背景に持つOCDは、第一選択の治療法である認知行動療法に抵抗を示す場合が多いため、支援においては、OCD症状の丁寧なアセスメントの必要がある (小倉・野中・砂川・矢野・下山, 2014)。その際、ASD児の感覚過敏も併せて正確にアセスメントすることは、より効果的な支援を組み立てる手立てになり得ると考えられる。

研究方法における課題

ここまでは、感覚過敏による生活上の困難が注目されていたが、感覚過敏が役立つ場合も報告されている。例

えば、当事者の綾屋は、視覚過敏のために目で場所の情報を得ることが困難であるが、聴覚過敏をエコーロケーションに活かし、「反響音を空間把握や自分の位置の確認の助け」として用いている（綾屋・熊谷，2008）。また川崎ら（2003）は、感覚過敏が触覚、聴覚、嗅覚の快体験に繋がっている場合があることを指摘しており、Bruneauら（2014）も聴覚過敏が音楽の好みを広げると報告している。このように、感覚過敏は当事者にとって生活において両価的な意味を持つ体験であると考えられる。

上記のような感覚過敏の体験や影響の複雑性を考慮すると、当事者の体験に即した理解が求められるが、現状の研究は質問紙調査や（高橋・増渕，2008）、当事者の手記の検討が中心である（生島，2009）。今後は、発達障害児・者を対象とする質的研究を進めることで感覚過敏の実際に関する理解が促されると考えられる。

まとめと今後の展望

発達障害児・者の持つ感覚過敏は、生活上の強い困り感に繋がり、近年有効な支援方法が開発されている。しかし、本邦においてはアセスメント法が充実しておらず、刺激と一対一対応で生じない困り感や、他の発達障害特性やメンタルヘルスとの関連を考慮した支援も発展途上である。また、感覚過敏の実際を理解するための質的研究もあまり見られない。今後は、より生活に即した支援方法の開発や、感覚過敏の主観的体験を理解するための調査研究の一層の発展が必要であると考えられる。

引用文献

浅井朋子・杉山登志郎（2007）. 対人・協調運動・感覚障害 日本臨牀 **65**, 3, 453-547.

綾屋紗月・熊谷晋一郎（2008）. 発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい— 医学書院

Ayres, A.J. (1979). *Sensory Integration and the Child*. Western Psychological Services (エアーズ, A. 佐藤剛（監訳）（1983）. 子どもの発達と感覚統合協同医書出版)

Bhatara, A., Quintin, E. M., Fombonne, E., & Levitin, D. J. (2013). Early sensitivity to sound and musical preferences and enjoyment in adolescents with autism spectrum disorders. *Psychomusicology: Music, Mind, and Brain*, **23**(2), 100.

Bromley, J., Hare, D.J., Davison, K., Emerson, E.

(2004). Mothers supporting children with autistic spectrum disorders: social support, mental health status and satisfaction with services. *Autism*, **8**, 409-423.

Brown, C.E., & Dunn, W. (2002). *Adolescent/Adult Sensory Profile*. San Antonio, TX: Psychological Corporation.

Bruneau, N., Cléry, H., Malvy, J., Barthélémy, C., Bonnet-Brilhault, F., & Gomot, M. (2014). Hypersensitivity to change in children with autism spectrum disorder: Convergent evidence from visual and auditory MMN studies. *International Journal of Psychophysiology*, **94**(2), 156.

Dunn, W. (1997). The Impact of Sensory Processing Abilities on the Daily Lives of Young Children and Their Families: A Conceptual Model. *Infants & Young Children*, **9**, 23-35.

Dunn, W. (2002). *Infant/Toddler Sensory Profile*. San Antonio, TX: Psychological Corporation.

Dunn, W. (2006). *Sensory Profile Supplement: User's Manual*. San Antonio, TX: Pearson.

Dunn, W. (2011). *Best Practice Occupational Therapy Second Edition*. New Jersey: SLACK Incorporated.

福島宏器（2014）. 内受容感覚と感情の複雑な関係 *Japanese Psychological Review*, **57**(1), 67-76.

Gillott, A., Furniss, F., & Walter, A. (2001). Anxiety in high-functioning children with autism. *Autism*, **5**(3), 277-286.

荻原拓（2009）. アスペルガー症候群と感覚過敏性別発達, **30**, 247-254.

萩原拓・岩永竜一郎（2011）. 感覚プロフィールの日本語版作成に関して 平成22年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）分担研究報告所 厚生労働省

Hazen EP., Stornelli JL, O'Rourke JA., O'Rourke JA., Koesterer K., McDougale CJ., (2014). Sensory Symptoms in Autism Spectrum Disorders *Harvard Review of Psychiatry* **22**, 2, 112-124.

Henderson, SE., & Sugden, DA. (1992). *Movement Assessment Battery for Children Manual*. London: The Psychological Corporation Limited.

東田直樹・東田美紀（2005）. この地球（ほし）にすんでいる僕のなかまたちへ：12歳の僕が知っている自閉の世界 エスコアール出版部

Hilton, CL., Harper, JD., Kueker, RH., Lang, AR.,

- Abbacchi, AM., Todorov, A., & LaVesser, PD. (2010) Sensory responsiveness as a predictor of social severity in children with high functioning autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **40**, 937-945.
- 平島太郎・伊藤大幸・岩永竜一郎・萩原拓・谷伊織・行廣隆次・大西将史・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次 (2014). 日本版青年・成人感覚プロフィールの構成概念妥当性——自閉症サンプルに基づく検討 精神医学, **56**, 123-132.
- 生島博之 (2009). アスペルガー症候群と感覚過敏 (1). 教育臨床事例研究, **21**, 2-15.
- 生島博之 (2010). アスペルガー症候群と感覚過敏 (2). 教育臨床事例研究, **22**, 1-14.
- 稲福繁・伊藤真理・早川徳香・井脇貴子・鈴木朋子・船崎康広・吉田敬 (2013). 自閉症スペクトラム障害における聴覚過敏 健康医療 科学研究, **3**, 1-7.
- 岩永竜一郎 (2013). 自閉症スペクトラム児への支援—感覚・運動アプローチを中心に— 小児の精神と神経, **53**, 109-118
- 片岡聡 (2014). 自閉症スペクトラム障害と不安—当事者の立場から— 不安障害研究, **5**(2), 110-115.
- 川崎葉子・三島卓穂・田村みずほ・坂井和子・猪野民子・村上公子・横田圭司・水野薫・丹波真一 (2003). 広汎性発達障害における感覚知覚異常 発達障害研究, **25** (1), 31-38.
- Koegel RL., Openden D., Koegel LK., (2004). A Systematic Desensitization Paradigm to Treat Hypersensitivity to Auditory Stimuli in Children with Autism in Family Contexts. *Research & Practice for Persons with Severe Disabilities* **29**, 2, 122-134.
- 小松和紀・北島英樹・武田篤・今野和夫 (2005). 自閉症の感覚過敏に着目した授業改善の取り組み～秋田大学附属養護学校小学部の実践から～ 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 **27**, 65-76.
- Lucker JR., & Doman A., (2012). Auditory Hypersensitivity and Autism Spectrum Disorders: An Emotional Response. *AUTISM SCIENCE DIGEST: THE JOURNAL OF AUTISMONE* **4**, 103-108.
- 松島佳苗 (2013). 自閉症スペクトラム障害児・者における感覚情報処理過程の障害 作業療法ジャーナル, **47**, 9, 994-999.
- 松島佳苗・加藤寿宏 (2014). 自閉症スペクトラム障害児にみられる感覚調整障害に関連する行動特性 小児の精神と神経, **54**, 37-47.
- McCracken, A. (1975). Tactile function of educable mentally retarded children. *The American Journal of Occupational Therapy*, **29**, 397-402.
- Miller, LJ., Anzalone, M., Lane, S., Cermak, S., & Osten, E. (2007). Concept Evolution in Sensory Integration: A Proposed Nosology for Diagnosis. *The American Journal of Occupational Therapy*, **61**, 135-140.
- ニキ・リンコ・藤家寛子 (2004). 自閉っ子、こういう風にてきてます！ 花風社
- 小倉加奈子・野中舞子・砂川芽吹・矢野玲奈・下山晴彦 (2014). 発達障害を有する子どもの強迫性障害への認知行動療法—最新の文献レビューから— 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, **37**, 34-40.
- 太田篤志・土田玲子・宮島奈美子 (2002). 感覚発達チェックリスト改訂版 (JSI-R) 標準化に関する研究 感覚統合障害研究, **9**, 45-56.
- 太田篤志・土田玲子 (2001). 体性感覚に関連する発達障害児の行動特徴—感覚発達チェックリストを用いた検討 小児の精神と神経, **41**, 149-155.
- Ronen, S., & Baldwin, M. W. (2010). Hypersensitivity to social rejection and perceived stress as mediators between attachment anxiety and future burnout: A prospective analysis. *Applied Psychology*, **59**(3), 380-403.
- 佐久間徹 (2013). 広汎性発達障害児への応用行動分析 (フリーオペラント法) 二瓶社
- 佐々木清子 (2013). 感覚運動的な視点を用いた発達障害児への作業療法支援 JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION, **22**, 3, 300-305.
- 世良彰康 (2010). 軽度発達障害児に対する感覚統合理論に基づく作業療法北海道作業療法. **27**, 2, 45-52.
- 高橋今日子 (2012). 発達障害 ヘンな子と言われつけて——いじめられてきた私のサバイバルな日々 明石書店
- 高橋智・増渕美穂 (2008). アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究—本人へのニーズ調査から— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 **59**, 287-310
- 高橋智・田部絢子・石川衣紀 (2012). 発達障害の身体問題の諸相 障害者問題研究 **40**, 1, 34-41.
- Tsuji, H., Miyawaki, D., Kawaguchi, T., Matsushima,

- N., Horino, A., Takahashi, Kazuhiro, Takahashi, Futoshi, Matsuyama., & Kiriike, N. (2009). Relationship of hypersensitivity to anxiety and depression in children with high-functioning pervasive developmental disorders. *Psychiatry and clinical neurosciences*, **63**(2), 195-201.
- Venetsanou, S., Kambas, A., Ellinoudis, T., Fatouros, I., Giannakidou, D., & Kourteissis, T. (2011). Can the movement assessment battery for children-test be the “gold standard” for the motor assessment of children with Developmental Coordination Disorder? *Research in Developmental Disabilities*, **32**, 1-10.
- Watson, LR., Patten, E., Baranek, GT., Poe, M., Boyd, BA., Freuler, A., & Lorenzi, J. (2011). Differential associations between sensory response patterns and language, social, and communication measures in children with autism or other developmental disabilities. *Journal of Speech Language and Hearing Research*, **54**, 1562-1576.
- White, S. W., Oswald, D., Ollendick, T., & Scahill, L. (2009). Anxiety in children and adolescents with autism spectrum disorders. *Clinical psychology review*, **29**(3), 216-229.
- 山本淳一・楠本千枝子 (2007). 自閉症スペクトラム障害の発達と支援 認知科学 **14**, 4, 621-639.

(指導教員 下山晴彦教授)